



ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2001年6月22日
第 5 号

盛会だった第1回年次大会

危機管理システム研究学会常任理事

後藤 和廣（三井海上基礎研究所、成蹊大学、
明治学院大学大学院講師）

綺麗に晴れ渡った5月19日、武蔵野の面影が残る成蹊大学で、危機管理システム研究学会の第1回年次大会が開催されました。登録会員総数が140名余の内60名を越える会員が出席し、大いに盛り上がった大会でした。

会員総会で1年間の学会及び分科会の活動が報告されました。機関誌ARIMASS Letterの定期発行、横浜市立大学の危機管理関連講座に5名の会員を講師として推薦したり、また日本規格協会のリスクマネジメント規格JIS Q 2001の勉強会では、意見が沢山出されていることなど活発な活動状況が報告されました。

また、記念講演として、経済産業省の矢野友三郎氏の講演がありました。同氏はJIS Q 2001開発・制定に関与され、そのときの経験談や、作成の経緯、今後の展望と言った貴重なお話を聞くことができました。また、研究報告では、会員から11件の報告があり、活発な論議がなされ、時間が足りなくなるのではと思われるほどでした。

大会終了後、懇親会が開かれましたが、大勢の方が参加され、研究報告の質疑応答では十分でなかった点をさらに論議されたり、久しぶりの再開をお互いに喜び合うなど、こちらも盛り上がりを見せました。

第1回年次大会は上記のように盛会に終わりました。これから2年度に入ります。2001年度の活動の基本方針として、会員総会で次の5項目が採択されました。

の基本は3分科会の深化とする

IS Q 2001「リスクマネジメントシステム構築のための指針」の発行に合わせたタイムリーな活動を推進する

学会の目指す「社会に向けての活動」のいくつかを具体的に実行に移す

社会に貢献し社会からも認められる学会としての基礎を確たるものにする

学会のさらなる発展を期し、会員数の30%増を目指す

今後は以上の方針の実現に向け活動することになります。1年で立派な年次大会が開催できた学会ですから2年度目もうまく活動できるでしょう。今年の研究報告の数や活発な質疑応答を振り返れば、当学会のさらなる発展は難しくないかもしれません。しかし、活動を活発にするためには会員のみさんの積極的な参加が必要です。より多くの会員がより活動され、来年の第2回年次大会を、今年を上回る盛会にしようではありませんか。

目次

盛会だった第1回会員総会	1	分科会報告	4
会員総会報告	2	事務局からのお知らせ	6

危機管理システム研究学会第1回会員総会報告

2001年5月19日(土)、成蹊大学3号館303教室に於いて、危機管理システム研究学会会員総会が開かれました。

議案
(1) 2000年度活動報告に関する件
(2) 2000年度収支決算報告に関する件
(3) 監査報告
(4) 2001年度活動計画(案)に関する件
(5) 2001年度予算書(案)に関する件
(6) 第2回年次大会に関する件
(7) 理事の承認に関する件

総会は、議長 徳谷昌勇会長の進行により、七つの議案が審議されました。議案(1)について、徳谷会長より説明があり、承認された。次に、2000年度収支決算報告 議案(2)について、監事の齋藤 淳氏から監査報告がなされ、承認されました。議案(4)(5)についても徳谷会長より説明があり、承認されました。議案(6)については、次回の第2回年次大会開催校は桜美林大学を予定しており、同大学教授の長濱昭夫氏(幹事)より歓迎の挨拶があった。議案(7)の理事の承認に関する件については、会則第14条「理事並びに監事は、正会員および賛助会員の中から総会において、選出する」の規定にしたがい、佐々木一郎氏(横浜市立大学)、鳥飼重和氏(鳥飼総合法律事務所)の2名が選出され、承認された。

2000年度収支決算書

自 2000年4月 1日

至 2001年3月 31日

(単位:円)

	予算	決算	差異		予算	決算	差異
会費収入	1,600,000	1,922,000	322,000	設立準備費	100,000	72,410	27,590
(個人会費)	600,000	672,000	72,000)	大会費	200,000	200,000	0
(賛助会費)	1,000,000	1,250,000	250,000)	会報費	150,000	178,175	28,175
雑収入	0	419	419	名簿印刷費	50,000	55,860	5,860
				会議費	80,000	18,000	62,000
				通信費	50,000	53,420	3,420
				事務消耗品費	80,000	63,693	16,307
				旅費交通費	200,000	0	200,000
				諸手数料	400,000	374,545	25,455
				パソコン関係費	63,714	63,714	0
				インターネット関係費	100,000	17,640	82,360
				雑費	30,000	1,300	28,700
				予備費	30,000	0	30,000
				次期繰越金	66,286	823,662	757,376
合計	1,600,000	1,922,419	322,419	合計	1,600,000	1,922,419	322,419

(注) 度個人会費@6,000×109名=654,400
2000年度学生会費@3,000×2名=6,000

賛助会費@50,000×25口
次年度会費2名@6,000×2名

(個人会費納入率 93%:109/117)

普通預金残高 592,779

現金残高 230,883

823,662

2001年度予算書

自 2001年4月1日

至 2002年3月31日

(単位:円)

収 入			支 出		
	予 算	前年度予算比		予 算	前年度予算比
前期繰越金	823,662	823,662	設 立 準 備 費	0	100,000
会 費 収 入	(1) 1,755,000	155,000	大 会 費	150,000	50,000
(個人会費)	855,000	255,000	分 科 会 研 究 費	150,000	150,000
(賛助会費)	900,000	100,000	年 報 費	(2) 230,000	230,000
雑 収 入	500	500	会 報 費	(3) 200,000	50,000
			名 簿 費	(4) 60,000	10,000
			会 議 費	60,000	20,000
			通 信 費	70,000	20,000
			事 務 消 耗 品 費	80,000	0
			旅 費 交 通 費	150,000	50,000
			諸 手 数 料	(5) 400,000	0
			パ ソ コ ン 関 係 費	40,000	23,714
			イ ン タ ー ネット 関 係 費	100,000	0
			雑 費	30,000	0
			予 備 費	230,000	200,000
			次 期 繰 越 金	629,162	562,876
合 計	2,579,162	979,162	合 計	2,579,162	979,162

(1) 個人会員 @6,000X 150名 X0.95=855,000

 賛助会費 @50,000 x 18口=900,000

(2) 年報費：FD入力作業及び印刷・製本

(3) 会報費：4回+郵送料

(4) 名簿印刷費+郵送料

(5) 事務作業費他諸手数料代

大会での議案決議は以上のとおりです。

分 科 会 報 告 (定 例)

【危機管理教育実践分科会】

世話人：常任理事 後藤 和廣（三井海上基礎研究所）

危機管理教育実践分科会報告：リスクマネジメント・システム教育カリキュラムの考え方

危機管理教育実践分科会では「リスクマネジメント・システム教育」の標準的なカリキュラムのたたき台を作成しました。現在このたたき台を基に委員各位に検討をお願いしています。以下たたき台の考え方をご案内します。分科会会員外の方でご興味有る方は、是非ご意見をお寄せ（電子メール：gotokaz@aol.com）下さい。

(1) カリキュラムはJIS Q 2001等のリスクマネジメント・システム整備に有益な教育を行うための内容とする。（包括的・総合的なリスクマネジメント教育のカリキュラムでとはしない）

(2) 教育のカリキュラム(案)は、「既存のリスクマネジメント・システム」をJIS2001 Qに組み込むことを前提とする。

(3)本カリキュラムによる教育の目的は次の通りである。

学部及び一般対象：リスクとリスクマネジメントに興味を持たせ、リスクマネジメント・システムの概要・必要性の理解。

大学院及びリスクマネジメント担当者：リスクマネジメント・システムの理解。システム整備に必要な、リスクマネジメント実践の基礎的事項、各共通事項の取得。

リスク毎の専門家教育：リスクマネジメント・システムの理解。(個別リスクのマネジメントの専門教育は各講師に一任する)

(4)カリキュラム(案)には、受講者に応じ、以下の2つの基本型が存在する。

初心者向け：「リスクマネジメント・システム」主体教育のカリキュラム

専門家向け：「個別リスクのマネジメント」主体教育のカリキュラム

(5)カリキュラム(案)は、標準的なカリキュラムであり、講師の意図、受講者にあわせ最適な内容とにする。

(6)ただし、具体的なリスクマネジメントの例示は、リスクマネジメント・システムの理解深めることになるので、システムを主題とする教育の場合でも、実行することが望ましい。

(7)また、個別リスクの専門教育の場合でも、リスクマネジメント担当者はリスクマネジメント・システムの理解が必要なので、システムの概要を説明することが望ましい。

(8)リスクマネジメント・システムの整備には、リスクマネジメント全体の流れと企業経営にとっての必要性の理解が必要であるので、カリキュラムにもその内容を入れた。ただし、理論化や一般化が不十分な領域もあるので、講師は、適宜選択し、カリキュラムを組み立てることが望ましい。

【RMS（リスクマネジメントシステム）研究分科会】

世話人：常任理事 指田 朝久（東京海上リスクコンサルティング）

<第3回研究会報告>（お詫び：第4号にて掲載漏れのため第5号に掲載させて頂きました。）

1.開催日時、場所：2000年12月8日金曜日、18時30分から20時30分まで、日新火災海上保険本店

2.出席者（15名）：徳谷会長、池内、坂、福田、五島、小澤、村上、吉川、松本、横井、指田、藪、三野、小島、長井

<第3回研究会報告> 徳谷会長の参加をはじめ15人が参加し活発に議論を行いました。今回は用語について現在JIS制定委員会で検討中の指針の文章やISOで検討中の用語の案について池内委員が解説を行い、それについて意見を述べる形ですすめました。規格の要求事項のなかでも「リスクマネジメントパフォーマンス評価」と「リスクマネジメントシステムの有効性評価」が特にわかりにくいのでこれらは普及にあたり相当解説が必要である。不確実性とリスクの用語についてやや誤解を招く表記がある。普及にあたりマスコミに危機管理やリスクマネジメントの成功例（例えば鳥取県西部地震では地域協議会の活動が成功しているが成功して被害が拡大しなかったが故にマスコミが取り上げない）を取り上げてもらい、リスクマネジメントはペイすることを経営者に理解してもらう地道な働きかけが必要だ、などの意見が出されました。次回からはモデル企業を定め具体的に規格の適用をして掘り下げていくこととしたいと思います。なお、その後の忘年会は盛り上がったことはいまでもありません。

第3回打合せは、「モデル企業の選定」でスタート。規格(案)の解釈を依り正しく浸透できるよう具体的な企業体を例にとってイメージしながら、漏れ、齟齬etcの見直し。議論が白熱してより具体的に進むが「憲法」位置付けの再確認に立ち戻ることもしばし。漸く本文に当たって見直し開始。第1行の“組織”の解釈では企業、自治体は合意したが持株会社は対象と成りうるか、で再議論。「全てのリスク」は「リスクの全て」が正しいのでは?!? 日本文を英語で読んでいる形相。白板に議事を取りながら進めるも10行進めるのに30分。8時となり時間切れ。そこはベテランの方々から、最初は遅々として、完了までに何年も掛かるように思われるが後半になるとスイスイ行くものですよ。最初を端折って楽をしてはいけません、と既に昇華された人生訓。会員の方々の言外の会話も素晴らしい。

会員 小澤 秀雄(株)日立製作所)

希望に満ちた21世紀であることを期待する中、世界中のどこかで悲惨な事故が相次いでいます。今年はY2K問題で世界中が緊張する中、大きな問題もなく過ごせた時には、ホッとした事を思い出しました。やはり、RM(リスクマネジメント)を多くの人々が実践して、結果、事故が発生しない方が人は幸せです。企業においては、過去から抱えるリスクの洗い出しから始めるRMが必要であると、論議の中で痛感しました。経営者のお手本となるRMシステムJIS規格であるかどうか、ひとつの視点のような気がしています。

会員 横井 靖(日新火災海上保険株)

今回は、現在、JIS制定委員会で検討されている「指針の解説」について、池内さんから説明があった。JIS制定委員会の中でも種々論議がされている様子が紹介されたが、参加メンバーもいろいろな立場の方がおられ、種々、意見が交わされた。私の感想としては、「完璧な規格というもの難しい、大事なものは少しでも多くの企業が実情に合わせてリスクマネジメントシステム構築に取り組んでみることである。まさに坂さんがいわれた「Say it, Do it, Document it」を実践してみることである。

会員 五島 光郎(フェニックスリスク総合研究株)

<第5回研究会報告>

1, 開催日時・場所 4月4日18時30分から20時30分、日立製作所本店会議室

2, 出席者(18名): 徳谷、樋口、竹中、小澤、長井、土田、藪、池内、五島、坂、野村、横井、北澤、中山、小島、福田、吉川、指田

<第5回研究会報告> リスクマネジメントシステム規格を読み解く2回目の会合でした。前回の振り返りを行ったのち、リスクマネジメントシステム担当者の役割、リスクマネジメント方針の二つを議論しました。JISQ2001も3月20日に制定され、また日本規格協会でも3月28日に説明会も開催されたことも踏まえて、議論を行いました。特にリスクマネジメント方針については、その範囲につきISO14000やISO17799との比較なども行いました。次回までに各自経営者の立場で具体的に方針を策定して理解を深めることとしました。分科会初の宿題です。なお、第6回は6月13日水曜日 日新火災海上保険の本店で行います。

追伸

詳しい議事については今回も長井氏が書記をかって頂きました。今後はホームページの分科会のページに張り付けて会員皆で参照できるようにしていきます。

私は、以前はメーカーでテレビ局向け放送送出 システムのシステム構築、現在はBS デジタル・データ放送局で放送送出・運用業務に従事しています。その中で、いつも考えていることは、「如何にして放送事故発生のリスクを最小限にして、放送事故を無くしていくか」という事です。

これには二つあって、 事故を未然に防ぐ対策、 事故発生時の早期復旧策および再発防止策です。この二つはいつも相関関係にあって、 の具体策が次の につながっていきます。しかし、もの見方がどうしてもミクロになってしまう。この分科会に参加することで、よりマクロな目でリスク管理ができるようになればと考えています。 会員 中山 達雄(株)メディアサーブ 技術本部)

樋口さんから誘われて分科会に参加しました。皆さんの格調高い議論を聞き、ひたすらご意見を拝聴していました。若やいだ気分になりました。私は以前、ガス事故やガス機器のトラブル対応等を担当していましたが、当時は漠然とした「危機管理意識」をもち、“経験”と“カン”で対応していた記憶があります。

その時の結論は事故やトラブルの発生率を減少させるための予防保全(PM)に徹することでありました。しかし、これに要する社会的コストを考えると単純ではないなというのが最近の心境です。リスクマネジメントシステムはこれに対する答えかなと思っております。私の視点は常に現場主義でありますし、定量的判断以上に定性的判断を重視したいと考えております。皆様のご指導、ご支援をお願いいたします。

会員 竹中 富知男(株式会社 エフ・ユー)

事務局からのお知らせ

1.分科会連絡先

第1分科会(教育実践) : 世話人: 後藤和廣

第2分科会(RMS) : 世話人: 指田朝久

第3分科会(情報交流) : 世話人: 鈴木敏正

2.新入会員紹介

氏 名	所属機関・職 名
足 立 敏 之	内閣官房・危機管理担当内閣参事官
児 玉 安 司	三宅坂総合法律事務所
副 枝 裕 司	松下電器産業 株式会社
高 木 啓 ^{あきら}	復康会 富士メンタルクリニック
土 肥 孝 治	土肥法律事務所 弁護士
中 俊 明	澁谷工業 株式会社
中 川 雅 博	株式会社 テクノファ
中 村 陽 子	財団法人日本医薬情報センター

3.住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には、変更前と変更後を並記のうえ、必ず文書にて事務局宛ご連絡ください。

e-mail : arimass@muh.biglobe.ne.jp
<http://www5b.biglobe.ne.jp/~arimass/>

2001年6月22日発行

印刷 株式会社 櫻 栄 .03-3288-5571